

2001年度

トラークル協会会報

第7号

2002年 3月

トラークル協会

〒271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1 日本大学松戸歯学部独語研究室気付

Tel. Fax 047-360-9308

2001年度春季研究発表会
レジュメ・質疑応答

リルケの書簡記述における
「体験」の変容について

植和田 光晴

1

リルケが中期を代表する『新詩集』『同別巻』に集められた所謂事物詩(Dinglyrik)を主導してきたのは「見ることの詩学」であった。この基本的な言語姿勢は同時期に書き継がれたリルケ唯一の長編小説『マルテの手記』では、「詩は、人々が思っているように、感情ではない……それは経験を積むことなのだ。一行の詩のために、多くの都会を見なければならぬ。人々を、事物を。[...] これらすべてが思い出せるとしてもまだ足りない。

[...] なぜなら、思い出自体はまだ詩ではないのだから。思い出が私達の中で血となり、眼差し、身振りとなり、無名になり最早私たち自身と区別出来なくなった時漸く、きわめて稀に訪れる時間に、一つの詩行の最初の言葉が、思い出たちのただなかに立ち上がり、そこから歩み出てくるといふことが起こりうるのだ」という一節(第14断片)に表明されている。ここで『マルテ』の「経験の詩学」を支えるのが「見る」ことである。しかしこの詩学は、『マルテ』の完結とともに破綻する。「私の芸術は、まったく事物に固執することを代償にしてのみ成立してきました。それは強情というものでした」(1910.8.30. マリー・タクシス・ホーエンローエ宛)、「私がこの書(『マルテ』)の後に、全く遭難の生き残りさながらに……遺棄されているのがお分かりいただけるでしょうか」(1911.12.28.)。

1914年6月20日、パリで成立した叙事詩『転向』には、リルケの中期から後期への詩的言語の文字通り決定的な転回が告知(予知)されている。それは、とりわけその冒頭の数行(「視覚の仕事はなされた、/いまは ころろの仕事を なせ / おまえの内部の像たち、あの捕らえられたものたちで。なぜなら おまえは / 像たちを取り押さえはした、しかし いま おまえは そのものたちを知らない。[...]」)から、明らかに読み取れる。ここで「視覚の仕事」といわれているのが、中期の詩作の根底にある「見る」姿勢である。それならば、言語的転回はこの「経験」=「見る」詩学をどの方向へ転じたのか。

1914年の夏、リルケはパリでゲオルク・トラークルの詩(詩集『夢の中のゼバスティアン』)に深刻な感銘を受けた。そのトラークルの詩を「感動し、驚き、予感し、途方にくれて」読み耽ったことを、リルケは翌年の書簡(1915.2.15.,L.v. フィッカー宛)で伝えている。リルケはトラークルの詩の「眺望」や「内部観察」を窓ガラスを透してのように「経験」する一方で、トラークル自身の「体験」は鏡像に封じこめられたようで、読み手=リルケの共同体験を拒むというのである。

ここで用いられている「経験」および「体験」の二概念は、この書簡の文脈では、リルケの読み=体験の記述として限定的に理解されるべきであることは当然である。しかしな

がら、後に優れたトラークル=批評としての評価を得ることになるこの書簡の記述は、期せずして、同時にこの書簡の書き手（批評者）リルケ自身の言語的事態をも告げている。また、「経験」「体験」の両概念は、リルケの言語的転向を跡づけるためのキー・ワードでもある。リルケの中期から後期への言語的転向は「外部」から「内部」への、『転向』の表現からすれば「視覚の仕事」から「こころの仕事」への転換であり、これらはずまるどころ上記の両概念を用いて「経験」から「体験」への言語的変容として表すことができる。

2

これらの両概念のうちとりわけ後者「体験」は重要であり、この「体験」は言語的転向の過程でそれ自体の意味・内容を変える、すなわち《変容》するのが認められる。リルケは1919年の『インゼル年鑑』に『体験』と表題をつけた散文小品を発表した。これはリルケが、その発表の7年前のドゥイノでの特異な体験を、その翌年（1913年）スペインのロンダで想起し、それを手帳に書き留めたもので、「自然の裏側」「開かれた内部」の体験を三人称主語の回想として語っている。

ここで確認すべきことは、『体験』が〈手帳〉に書き留められたのが『転向』の成立よりも前、すなわち未だ言語的転向が完了する以前であり、『インゼル年鑑』への寄稿はそれからすでに6年を経た時点でおこなわれたことである。この5年の間、〈手帳〉のなかに休眠状態で封じ込められていた草稿が解凍されて、なんらの手も加えられずに『インゼル年鑑』に移されたとは考えがたい。この点に関して 1. シュナックの『リルケ・クロニク』の記載は示唆するところが大きい。

それによれば、当初リルケは、これとはまったく別の作品（翻訳）を『年鑑』に寄稿するはずであった。これの不調のため急遽代役として『体験』が引き出された。『年鑑』の編集者（カタリーナ・キッペンベルク）に宛てて送付された原稿には、『体験』という表題だけではなく、覚え書きとして、体験の場所「ドゥイノ」の名とともに、その成立に関わる特別な事項が付記されていた。K. キッペンベルクは原稿受理にあたってこの「ドゥイノ」の削除を求め、リルケはそれに同意した。

このリルケの同意（譲歩）には、予定されていた寄稿作品の変更の負い目が強く働いたと思われる。「他に多くの作品が手元にあったなら……私は今も尚この手記[!](『体験』のこと)を手放してはいなかったでしょう」と K. キッペンベルクに言い添えている。いずれにせよ、こののちリルケはこの同意が、単なる地名の削除にとどまらず、作品としての『体験』から本質的な何ものかを失わせたことを覚る。これの代償であるかのように、リルケは『インゼル年鑑』収載の『体験』について、その読者に宛てた書簡で、あるいは弁明し、あるいはそれが実体験であることを強調している。(1) タクシス夫人宛「……それは私の気持ちにそむいて印刷させた『体験』です」(1918. 12. 19.)。(2) カロリーネ・シュタウフェンベルク夫人宛「……全く特別なのが『体験』という表題を付して発表した日記[!]のページです……それは) ドゥイノの庭で、まったくそのとおりに私の身に起こったことです」(1919. 1. 23.)。(3) アーデルハイト・フォン・デア・マルヴィッツ宛「……可能な限り精確に語られた(genau erzählte)『体験』……」(1919. 1. 14.)。

上のカロリーネおよびアーデルハイトに宛てた手紙には、言語表現の可能性の限界を越えた、特異なこの『体験』が呼び起こした別の体験、1912年4月、ロマン・ロランの演奏するグレゴリオ聖歌の体験が詳細に語られている。この音楽体験は、リルケに、『体験』が生と死の平衡・合一が生起する「自然の裏側」への「聖別」の記録であることを直観させる契機になった、と。

3

上の経過を改めて辿れば、水平的時間軸では転向—以前の〈手帳〉に記された一つの特異な「体験」の草稿は、殆ど実質的内容を改変することなく、転向—以後の作品『体験』として公表されたということになる。これはすなわち、(1) ロンダで想起され〈手帳〉に書き留められた『体験』—草稿において、詩『転向』—後の言語的諸要件が——リルケ自身にも気づかれずに——すでに充たされており、そのことが〈手帳〉の中で休眠状態におかれた「草稿」を完全な忘却から護った、(2) 「草稿」が休眠状態を解かれるとき、つまり最終稿へと移される過程で、作者＝リルケの原初「体験」の(再)想起・(再)体験によって『体験』の原—テキストが『転向』—後への位置づけに相応しい言語的内実へと《変容》させられた、ことを推測させる。

この(2)の《変容》については、『体験』の両テキストにおいて、その変更を直接的に証明することはできない。ただ、先にカロリーネおよびアーデルハイトへ宛てた手紙で、『体験』の受容のテキスト環境＝コンテクストの《変容》は明示可能である(すなわち、それらの書簡における音楽—生と死の平衡・合一の契機の記述がそれである)。

両角正司 : 今のところですが、古くはドゥイノ以前に沢山出てきます。例えば Judith RyanはHirtを Dichterとしてしていますね。(Hirt:eine Figur, die für ihn<= Dichter> Vorbild werden soll. ただし「外部の Erscheinungen」に対しては、die Figur des Hirten, der ein ganz anderes Verhältnis zur Natur hat, als der Dichter. Der Hirt steht der Natur völlig naiv gegenüber ,...)

植和田 : スペイン三部作ですね。

両角 : それからリルケは、理解するのに ratlos と言っているのではないのでしょうか。

植和田 : それが含まれていると思います。どうしても入り込めない、それが通じてくるということです。

両角 : ratlosというのは、トラークルの詩に対して理解するのが難しいということだけを言っているのですね。

植和田 : そうですね。その後でその同じ手紙の最後で「トラークルは一体何者であったのか」と言っています。つまりリルケにとってはどこまでも通常の詩的理解の対象であった筈なのです。

両角 : この手紙を書くきっかけはフィッカーが詩を送ったのですね。

- 植和田 : そうです。その後キルケゴールの著作もフィッカー経由でリルケに送られています。もちろんずっと前からキルケゴールを読んでいるわけですが。そういう経過はあると思います。
- 両角 : もう一つ、先程言われた「自然の裏側に」というのは、andere Seite der Natur ですか。
- 植和田 : そうです。
- 両角 : 三人称で書かれた『体験』の文章以前に例えば『Neue Gedichte』の中に似たような表現があるのです。例えば andere Seite der Musik (So als wäre ihre=> die Stille) andre Seite / der Gesang, dem keiner widersteht.) のような言い方があります。
- 植和田 : andere / Seite der Luft というのがある、あの『An die Musik』は 1916 年ですからずっと後です。
- 両角 : 『Die Insel der Sirenen』でした。それをまとめてああいう形で出たのはドゥイノの体験ですね。ただドゥイノ体験ではなぜ三人称にしたのですか。
- 植和田 : それについては別に今書いているのですが、あれは三人称のフィクションであり、つまりドゥイノという添え書きを取ってしまったらフィクションであり、そしてあれは体験話法と見られても仕方がない構造をもっている。つまり das lyrische Ich が何らあれを言語化したとは見えない。そういうふうに言語構造的に思えるのです。そこに非常に問題がある。それをやってしまったから後に大いに弁明に努めなければならなかった。そういうふうに一応理解してみたわけです。
- 両角 : 例えば『新詩集』かその『別巻』であるのか忘れてましたが、『Der Ball (ボール)』という詩がありますね。あれの一番最後のあたりですけれども、リルケは完全な作品と自分で言っている。だからあの頃まではただ詩学として Dinggedicht と言っていましたね。
- 植和田 : そうですね。
- 両角 : それ以降失われて破綻があり、沈黙の十年間と言われているわけですね。
- 植和田 : それと関連しているのですが、リルケ自身にとっても思いがけないところで Wendung が出てきたらしい。それをアンドレアス・サロメに告げています。
- 両角 : 「眼の仕事は終わった」ということですね。「心の仕事」と言ってますね。
- 植和田 : 「心の仕事」は非常に観念的に取られやすいですが。
- 高橋喜郎 : Wendung と言うことは、簡単に言ってしまうと、Neue Gedichte あたりまでですと、Ding an sichを追求する詩ですよ。ですからそれは主観を交えないで物を背景から浮かび上がらせるような手法であると思うのですが、そうすると Wendungの後に主観との複合的な仕事がなされるようになったということですか。
- 植和田 : 「主観」と「客観」と言うことになりますと実は問題があるんですが。
- 高橋 : 眼の仕事をやめたという形となりますか。
- 植和田 : それはハンブルガーは根本的には解消されないと言っているわけです。最終

的には主観的なものになるわけですが、対象を捉えようとするのは、当然表現者が疎外されているということになります。それにあきたらなくなったのではないかということです。要するに表現者自身が言語とともに詩を現実として一つの詩の中に織り込まれるということです。

高橋 : それでは象徴に移るといえることですか。

植和田 : 『体験』で言われているのは、空間的なものとして、もちろん時空的なものになりますけれども、要するに肉体の中に自然が入り込んで来て自然と肉体の境目が分からなくなってしまうことです。それから視覚は、大体前方に事物を認めるということですが、それがどうも後方にぼやける。それは、Dinggedicht の、言わば無効化と言いますか、超えられている状態ではないかというふうに見られるのではないのでしょうか。

高橋 : 簡単に言うと主体と客体の合一ということですか。一時期初期の詩集の場合には自分の感情の吐露した『Das Stundenbuch』ですよね。その次に『Das Buch der Bilder』。その辺あたりから自分を消去して対象に行こうという形で『Neue Gedichte』、『Der Neuen Gedichte anderer Teil』あたりでそれが頂点を迎えるわけですね。それでは「その向こう」と言うのは、自己と対象の合一ということですか。

両角 : 今言われた通り『Das Stundenbuch』、『Das Buch der Bilder』の頃は感情というものが大事であった。それを克服・排除する意味で徹底的に見るといえる作業があった。1902年の---

高橋 : ロダン体験ですか。

両角 : それをリルケは言っていますが、それは以前に既に始まっていますから、それを余り高く評価しなくてもいいのではないかということはあるかもしれませんが、要するにその成果が『Neue Gedichte』、『Der Neuen Gedichte anderer Teil』の中に含まれている、いわゆる事物詩ですが、その構造をみると、ただ単に主観を排除したという作品ではないのです。よく言われる Umschlag と Verwandlung ですが、ある対象を表現するのに全然別な対象を Gegenpol として立てて、それを極端にまで拡大していくとある一瞬 Umschlag が起こり、新しい段階、表現が Verwandlung になる。そういう形のダイナミックな方法は、すでに『Neue Gedichte』あたりには沢山ある。それがいわゆる事物詩ではおさまらなくなってくる。

高橋 : ではその変化は『Wendung』ではなくて『Neue Gedichte』の方に萌芽があるということですね。

両角 : 「見る」という行為があって、それが基礎になって、その上に「心の仕事」となってくる。

高橋 : その一番の転換点にあるのが『Erlebnis』ですね。

両角 : 今私自身他のところに関心があって、ホーフマンスタールと比較したのですが、その『詩についての対話』で体験・経験どちらかですが、出てきます。ちょうどリルケは『マルテの手記』の中で沢山「経験」する。そしてそれは

全部圧縮されたために光を失って、そこに光が一瞬当てられる。そういう詩が出てくる。似たような表現であると私には感じられます。

植和田 : その『詩についての対話』には本来コスモロジーみたいなところがあって、暗黒星雲から星が生まれてくるような感じですね。ホーフマンスタールの10代の詩『体験』を見ると象徴派の典型のようですね。

両角 : その象徴という表現には、ホーフマンスタールは随分慎重でした。

三枝絃一 : 先程リルケの言語世界とトラークルのそれとは異なると言われましたが、トラークルの言語世界はどういうものとお考えですか。

植和田 : 実は相当以前にトラークルについて論じたものがあるのですが、ごく簡単に申し上げると、そこでは「トラークルは空間から詩作り、リルケは空間を詩作したのである。トラークルは常にその内部にあり、リルケは実際は空間を過りながらその外部にあった」と言っています。つまり空間は対照的に思い浮かべられると直ちに形態へと転換するのです。だからリルケの言語はこういう世界にこの段階では留まっていた。トラークルの場合は要するに言語の中で言わば繭を作っている、と捉えていたようです。

三枝 : リルケはその空間のなかへ、言わば繭の中へ最後まで入ろうともがいているという感じですか。

植和田 : そうですね。ハイデガーの批判に乗っかれば、あの言語装置では入れないと言うことです。トラークルは始めからそういう言語の場にいたということになれば、ですね。

三枝 : トラークルもその空間に必ずしも始めから完全にもぐり込んでいたという感じはしない。だんだんもぐり込んでいったのではないのでしょうか。

高橋 : ポリなどはむしろリルケは、形式の面では詩の形が熟すだけ生きることができたし、そういう意味でそれだけキチッとした詩形を持っているけれどもトラークルはそういう時期が十分に与えられなかったと言っています。早く死んでしまったから。また詩形そのものの転換も早かった。『夢の中のゼバスチャン』のような詩形が熟して行けばリルケの『ドゥイノの悲歌』のような詩形になっていったという感じはします。

三枝 : もしトラークルが長生きしても必ずしも『ドゥイノの悲歌』のような詩が作られなかったのではないのでしょうか。詩の次元が違うので他の方向に行ったのではないかという思いが強いのですが。

高橋 : トラークルは独自の詩形を紡ぎ出すまでには至らなかった。どちらかという点では未完で終わってしまったのではなかったかということは多少はあるのではないのでしょうか。

三枝 : あくまでも仮定の話ですから、それを云々するのも余り意味はないと思うのですが、しかしある意味ではトラークルは最終的には彼なりの完成を見せているのではないのでしょうか。

高橋 : 例えばポリなどは、トラークルがもう少し長生きしていれば、むしろ本来だったら後期中盤位の詩が一つのトラークル独自の詩形というものとして定

着するところまでいったのではないか、とっています。

三枝 : 森有正もリルケを論じており、また「体験と経験」についてっています。
それと関連してリルケの体験あるいは経験をみるといかがですか。

植和田 : 森有正のその論については余り知らないのですが、北村透谷は「心の内部」というものは、言わば二層になっていて、普通は一層までは入れるのであるがその奥には知られない内部がある」とっています。例えばリルケがトラークルの詩のなかへは入り込めないというのは、その最初の一層目には入っていると当然思えます。確かにリルケはトラークル体験をしていたのだが、どうしてももう一つ中に入っていけない。鏡の中へ入っていった人は幾人かはいただけけれども、他の者は鏡の前で「けうとくされるか、素通りさせ」られてしまうと『オルフォイスのソネット』の中にあるのですが、これはトラークル体験と可なり重なるように感じられるのですけれども。

三枝 : たしかにリルケは鏡像を扱った詩を幾つか書いていますね。ところで体験をいろいろ積んで経験が形成されると森有正はっています。つまり経験はその場合体験の上位概念という事になります。ところでリルケの場合はそうではなくて経験を越えた体験ということですか。

植和田 : 一つ転換したことが体験であるということです。英語とかフランス語であれば全て「経験」で表されるのではないのでしょうか。『マルテの手記』の当該の箇所では経験は複数形で出ているわけですね。要するに経験は個別的なものが大事であるということです。一般化されるのは経験ではない。そういうところもあるのではないのでしょうか。Erinnerungenも複数形で出てきます。つまり経験を一つ一つ忘れてそれが血と肉となったものを想起・肉化して、それが始めて詩になるという、そこで体験というものを出せば、言わば弁証法的なある一つの転換があった、と言えそうな気がします。

三枝 : それを越えて Wendungということですか。

植和田 : 『Wendung』という詩では Wendung自体は noch nicht です。その後で実際それらしいものが表れているということなのです。その論証をやってみたのですが。

2001年度秋季研究発表会
レジュメ・質疑応答

トラークルのヘルダーリン受容に
関する若干の考察

三枝 紘一

ヘルダーリンのトラークルへの影響は、すでに初期から見られる。1908年4月に成立した最初期の詩の一つ『朝の歌(Morgenlied)』は明らかにヘルダーリンの詩(特に『春に捧ぐ(An den Frühling)』)の強い影響が認められる、というよりむしろその模倣と言ってよい。全般的にヘルダーリンの影響は卓越しているが、中期にはランボーの影響がヘルダーリンのそれを凌駕する。しかし後期に至ってヘルダーリンの影響が顕著になる。それは詩の領域に留まっただけではない。1908年の詩人の二人の姉に宛てた書簡は、『ヒュペリオン(Hyperion)』の主人公ヒュペリオンのディオティーマに宛てた書簡の文体に倣っていると指摘されている。またバルチュによれば、トラークルはヘルダーリンその人の生にも興味をもち、自らの詩のなかに Bruder として登場させているという。すべての Bruder がヘルダーリンをさしているとは思えないが、例えば『詩篇(Psalm)』のある稿体には、Hinter ihm steht sein Bruder, der, ein trauriger Gesell, im grünen Schwaben gestorben ist. という詩行がある。この Bruder はヘルダーリンを指しているとみて差し支えないだろう。しかし第二稿では、Hinter ihm steht sein toter Bruder, oder er geht die alte Wendeltreppe herab. とプライベートな環境を暗示する(Wendeltreppe はトラークルの育った家に備えられていた)中に Bruder は置かれてしまい、ここではすでにヘルダーリンは連想されず、むしろトラークルの死んだ兄に思いが及ぶ。またこれもよく指摘されていることであるが、『ヘーリアン(Helian)』の Wo vordem der heilige Bruder gegangen, / Versunken in das sanfte Saitenspiel seines Wahnsinns, の Bruder も、トラークルの詩の性質上ヘルダーリンその人と俄には同定出来ないが、「その狂気の」という言葉もあり、ヘルダーリンが詩人の念頭にあったことは疑いえない。

トラークルの詩『夕べの夢想(Träumerei am Abend)』は、ヘルダーリンの『パンと葡萄酒(Brot und Wein)』の第一部の影響が顕著である。特に類似した箇所を並列して挙げてみると、トラークル: Der Markt ist leer von roten Früchten und Gewinden. (ヘルダーリン: leer steht von Trauben und Blumen, / Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.)。トラークル: In einem Garten tönen sanften Spieles Klänge, (ヘルダーリン: Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten;)。トラークル: Ein Wagen rauscht, (ヘルダーリン: rauschen die Wagen hinweg,)がある。この他にも類似した表現或いは同一の単語が多数見られる。これを見るとトラークルは『パンと葡萄酒』を傍らにして『夕べの夢想』を書いたように感じられる程である。『パンと葡萄酒』の第一部は夕べの街の親しみを覚える情景を表現している件で、写実的であると言える。これ

に対して『夕べの夢想』はタイトル通り、様々な幻想とも言うべきイメージが卓越している。引用した類似した三箇所は幻想化されていないのも影響が確実視されうる根拠となろう。いずれにせよ語句の上では『パンと葡萄酒』の影響は強いのであるが、トラークルの特有の世界は揺るぎない。

ヘルダーリンの有名な短詩『生半ば(Hälfte des Lebens)』はトラークルの多くの詩に様々な痕跡を残している。先ずこの『生半ば』の前半部の冒頭三行の影響が明らかなのは、---, versunken im Schlamm des Teichs / Und darüber neigen sich die gelben Blumen des Sommers / 『風、白い風、酔った者のこめかみに囁く... (Wind, weisse Stimme, die des Trunkenen Schläfe flüstert ...)』である。語彙としては、gelben Blumen が共通である。『生半ば』では、gelben Birnen となっているが、当時の版では、したがってトラークルが特に利用したとされる Paul Ernst 版でも、まだ gelben Blumen である。次にイメージに関しても類似の構成が窺われる。『生半ば』のこの部分は生命感溢れる理想的な美しい動的調和のイメージ、つまり梨の実と野薔薇ごと陸が湖へと掛かっているイメージが描出されている。これに対してこの詩の部分は同じような運動の方向が見られるが、黄色い花が傾いているのは、「(清らかな)湖水」の上ではなく、「沼の泥」の上である。後者にトラークルの詩にかなり多く見られる美しいものと醜悪なものとの近接がある。これはランボーの手法である。この時期ランボーの影響が卓越し、この手法を取らせたものとも一面思われるが、むしろトラークルのイメージ世界がおおむねネガティブであり、その文脈の中に適合するようにヘルダーリンの詩に由来する語や詩句が置かれたために結果的にネガティブになったと考えた方が妥当性があるように思われる。

又 Laß, wenn trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt. 『途上(Unterwegs) II』についても同じような処理が行われている。先ず語彙であるが、trunken, von, das Haupt が共通であり、これだけでも影響が確かであることが分かる。イメージの点では、『生半ば』は、「頭を清らかに冷やかな水にしたす」のに対して、この詩の部分では「頭が下水溝に沈む」となっている。運動の方向や構造は似ている。しかしここでも heiligen-nüchterne Wasser が Gosse という全く対照的なネガティブな語に転換される。

尚 Da erbleicht von Küssen / Die trunkne Stirn ihm 『向日葵(Die Sonnenblumen)』も『生半ば』と関係があり、「接吻」に「酔わ」ずに「青ざめる」と完全に対照的なネガティブな状況に転換される。

更に Und die gelben Blumen des Herbstes / Neigen sich sprachlos über das blaue Antlitz des Teichs. 『風景(Landschaft)』(第2稿)も『生半ば』に関わりがある。これは前に挙げた『風、白い風、酔った者のこめかみに囁く...』の部分と同じような構造とイメージを持つが、同じ「黄色い花」が「夏」の花ではなく「秋」の花になり、その花が「傾く」のは、同じ沼であるが、その「泥」の上ではなく、その「青い水面」となる。しかし傾く様として、『生半ば』の独特な語である、sprachlos が加わり、やはりネガティブなイメージに変わる。

最後に Der Wind klirrt leise in den leeren Gassen. 『夕べの鏡(Abendspiegel)』は『生半ば』の後半部と関係があることが考えられる。Wind と klirrt (klirren) が共通であるが、klirren は独特な用語で影響関係は否めないだろう。しかし sprachlos と klir-

ren は双方の詩の中で浮いているように見える、つまりしっくり収まっていない印象を受ける。つまり花のしずかさを形容するのに sprachlosでは違和感を与えるし、また風そのものが klirrenするのは無理があるからである。したがってこれらの語はまだ借り物ということが出来るだろう。これらがしっくり収まるのは後の作品においてである。例えば、ヘルダーリンの詩『齡(Lebensalter)』の影響が明らかな『夕べの国(Abendland)』の第3部の冒頭の部分に使われた sprachlosがそうである。また『沈鬱(Die Schwermut)』には、sprachlos ばかりでなく同時に klirrenが生かされている箇所がある。Unter Eichen / Sprachlos! O grollende Schwermut / Des Heers; ein strahlender Helm / Sank klirrend von purpurner Stirne. ここでこの二つの語がところを得た感がある。この部分は戦闘が終わった戦場の風景が念頭に浮かぶが、やはりこの二つの語は大都会や戦場のような無機質で非情な環境に置かれると効果を発揮する語である。

前に挙げた例に見られるように、ヘルダーリンのポジティブな詩句をネガティブなそれに置き換える傾向が窺われる。他の例をあげると、『憂鬱(Melancholie) I』の第3稿に... in schwarzen Laugen / Des Sonnenjünglings feuchte Locken gleitenという詩句があるが、これはヘルダーリンの詩『太陽神に(Dem Sonnengott)』の詩句、..., der entzückende Götterjüngling // Die jungen Locken badet' im Goldgewölk'; の影響があると考えられる。共通の語彙として Jüngling と Locken がある。しかしその Locken が入っているのは、一方は「黒い灰汁」であるが、もう一方は「金色の叢雲」である。ここでも明白な対照的な表現、すなわちポジティブなものネガティブなものへの転換が見られる。

因みに Auf deine Schläfen tropft schwarzer Tau, という詩句が『少年エリスに(An den Knaben Elis)』にある。インスブルック版では、これと対照してヘルダーリンの狂疾期の詩『教会の墓地(Der Kirchhof)』の詩句、ein Baum mit Früchten hängt; / Mit schwarzen tauigen, を挙げているが、「か黒く露けき(果実)」に対して、「黒い露」とネガティブな組み合わせになっている。影響が確かであれば見事な転換であるが、おそらくヘルダーリンの狂疾期の詩をトラークルは読んでいない筈であるから、この場合は影響は云々出来ないと思われる。しかしこの「黒い露」は同じトラークルの Der schwarze Schnee (『譫妄(Delirium)』) やツェラーンの詩『死のフーガ(Todesfuge)』の「黒いミルク(Schwarze Milch)」の系譜に繋がるものである。

次に影響の希薄化、あるいは影響の独自化のプロセスが見受けられる例を挙げる。それは例えばヘルダーリンの詩『パトモス(Patmos)』の最終行 Dem folgt deutscher Gesang. の影響が見られる箇所である。それは『ヘーリアン』の稿体にある Dem gesungen ein Lied folgt. である。特殊な表現なので影響関係は明らかであり、これでは模倣と言っても差し支えないであろう。この行の下には、ein と Lied の間に nachtigesがあり、またその下に Dem zu Zeiten der Trunkene folgt. と書かれている。ここには Dem — folgt という枠組は残しながら、変えようという意思が明らかに見える。しかし前者はトラークルの語彙であるが、もしかしたらヘルダーリンの詩群に「夜の歌(Nachtgesänge)」があるので避けたのかもしれない。又後者では余りにも卑近な表現に墮してしまうので、トラークルはこの部分を Eh dem Schweigen des Winters folgt. として決着をつける。dem

— folgt という骨組みは変えないのであるが、「それに続く」内容は完全にトラークルの語彙に変えられてしまう。これによってヘルダーリンの独特な言い方が詩人の世界に組み込まれ、逆に言えば影響が希薄化されることになる。トラークルの場合、一般的に稿を追うごとに影響関係が希薄化される傾向があるが、これは詩人自身が影響を意識していたことの証左であり、また同時に独自の表現への志向と考えられる。いずれにせよ、ここでも表現がネガティブ化される。この dem — folgt という言い回しは、『ヘーリアン』のみならず他の詩にも使われている。『アーフラ(Afra)』には、dem folgen dunkle Jahre. 又散文詩『悪の変容(Verwandlung des Bösen)』には、Dem folgt unvergängliche Nacht. とある。この二つの例の場合、いずれも詩を締め括る語として、『パトモス』と同じように詩の最後に来ているのは、影響が確かなものであることの一つの証である。そしてこの言い回しがこのように幾つかの詩に横断的に見られることは、これに相当な愛着を持ち、自らの詩にいかに生かそうかと長い間考慮していたかが分かる。

ここでそれぞれの成立の年代を見てみると、『ヘーリアン』は 1912 年から13年にかけての冬に成立した。一方『アーフラ』と『悪の変容』は 1913 年の秋に成立した。前者、特に後者において否定性の深化が見られる。現代は明けることのない夜という認識が更に深まっていくことが分かる。ヘルダーリンは、現代という時代は古き神々はすでに去り、しかし新しき神々は未だ到来しない二重の欠如の時代、すなわち「乏しき時代(dürftige Zeit)」であり、「夜」であるという認識に立っているのであるが、その夜はいつかは明けるという確信、というより信念を持っている。そしてこの夜にあって「揺るぎない文字を育み、持続するものをよく積み明かす」のに適うものは、「ドイツの歌(deutscher Gesang)」であるという信念がある。その信念の裏には自らの歌がそれであらんとする自負がある。これに対して「ドイツの歌」の代わりに「Schweigen des Winters(冬の沈黙)」や「dunkle Jahre (暗い年々)」や又「unvergängliche Nacht (無窮の夜)」を置き換えたことから判るようにトラークルにはそういう信念がなく、夜は永久に続くという絶望だけがある。西欧の歴史を簡約に詩的に処理し纏めた『西欧の歌(Abendländisches Lied)』の Ein Geschlecht(一つの性あるいは一つの種族) や最後の詩『グローデク(Grodek)』の Die ungeborenen Enkel(生まれざる孫たち) に微かな希望の光が仄めくが、こうした独創的な、まさに苦肉の表現はむしろ逆に絶望の深さを明るみに出すことになった。したがって前述したようにトラークルがヘルダーリンを兄と見なしているととれる部分があったところから、トラークルをヘルダーリンの弟と見なすことが一般化しているが、トラークルは、ヘルダーリンが自覚していた使命の衣鉢を次ぐ正統な弟という意味では、弟たりえないと言える。

ラインホルト・グリム(Reinhold Grimm)も言っているように、トラークルは確かにヘルダーリンの作品から様々な語彙や表現を石切り場から切り出した石材のように自らの詩を作る場合に利用している傾向は強いが、単なる借用や模倣いわんや剽窃とは異なる。トラークルは詩の素材をヘルダーリンに求めても、例えばその言葉を同じような文脈では使わずに、あるいは意味合いを転換している。未消化のもの例も幾らかは見受けられるが、多くの場合ヘルダーリンの詩句に類似の詩句の中でネガティブな転換が見られる。それはしかしヘルダーリンの詩句をないがしろにするものではなく、矮小化あるいは卑小化とは

言わないまでも幾分狭小化と見られる部分もあるが、逆にそれらは斬新なリアルな印象をもたらし、トラークル独自の世界へ発展的にそれらを受容して、ほとんど自家葉籠中のものになっていると言えるだろう。

伊藤卓立 : 『Hälfte des Lebens』の1行目ですが、ヘリングラート版から Birnen が Blumenに変わったのですか。

三枝 : 逆に Blumen が Birnen に変わったのです。

高橋喜郎 : ヘルダーリンが Birnen に変えたということは、Rosen が出てくるから、花が重なるからですね。

三枝 : 編纂の段階で編者が間違えたらしい。

高橋 : そうすると本来 Birnen なのですね。後で Rosenが出てくるから意味的に二つ重なり詩としては劣るからですね。

三枝 : Blumenでは一般概念になってしまう。具体的なものにしないと面白くないというところもあるでしょう。

高橋 : 最初の段階で間違えた。それが訂正されずにいて、ヘリングラートが訂正したということですね。

三枝 : そう思います。ディルタイもこれで論じていました。

三木正之 : 『Der Kirchhof』はヘルダーリンが狂気に陥ってからの最晩年の作ですね。そうするとそれはトラークルは知らなかったのではないですか。

三枝 : そうですね。まだトラークルが利用した詩集には載っていなかったと思います。しかし似ています。もし万が一影響があったら見事な表現の転換とは思いますが。

三木 : nächtiges と一つ独立している。これは Ein Lied をもう一度言い直したというつもりで置いているのでしょうか。ヘルダーリンはある言葉を言って、それをもう一度言い直すということがありますね。その感じですか。

三枝 : これは稿体そのものですから、nächtiges をその下に書いたのでしょうか。

植和田光晴 : Ein nächtiges Liedと言うことですか。

三枝 : Ein Liedと先ず書いて、その後でその下に nächtigesを書いたものと思います。その間を開けたのは編纂者であり、元々は Ein Lied は繋がっていたと思います。ヘルダーリンがその間に後で nächtigesを挿入したということでしょう。

三木 : 特定の呼び名があったと思うのですが、例えば『Brot und Wein』の die Nacht kommt, とあって、それを受けて die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen こういうふうに畳みかける言い方があります。その上にも die Schwärmerische が der Mond を代表する形で die Nacht kommt, と言い直しているわけです。つまりある言葉を何度も言わば畳みかけるように言い直す、この形容詞的な名詞の言い方はヘルダーリンだけでなくトラークルの詩にも再三再四現れている。詩の類似性、詩の用法そのものに

ある。その方が詩人としては決定的であると思うのですが。自分の言葉を創り出すということですから単語以上に詩形というのですか、それはリズムと繋がってくるわけですから、一遍何かでお当たりしていただけたらと思うのですが。

- 植和田 : それから『Traumerei』と『Brot und Wein』を対比してみると、なるほどと思うわけです。例えば Fremdlingとか Fremdlinginという語句がいろんな作品に登場しています。従来の解釈ではそれは実はヘルダーリンをイメージしているのだというのがありました。こういう示し方で言われますと、ヘルダーリンとトラークルとの関係は確かにあると納得出来ます。又 Bruder という時にヘルダーリンというものが意識される。これも従来の解釈では有力な解釈であると思うのですが、これは全然学問的ではないのですけれども、トラークルの詩の中には詩の作りだす全体的な解釈ではむしろノヴァーリスの方に近いものがあります。あるいはもっと言えばホーフマンスタールのなものについても言えることですが、『ノヴァーリスに寄せる』という詩も書いていますからノヴァーリスを意識していたのではないかと思いますけれども。
- 高橋 : ちょっと話は違いますがけれども Basilは Fremdlinginという一章を設けていますね。
- 伊藤 : トラークル自身手紙のなかでヘルダーリンに言及しているドキュメントは残していないんですか。
- 三枝 : ないと思います。
- 三木 : Otto Müller 出版社から出たトラークルに関する最初の三巻本の中の『Erinnerung an Georg Trakl』の中で Lachmann が『ヘルダーリンとトラークル』というのを書いていたのです。次に出した版にはその部分は除外されています。解説に偏りがあると見たのでしょうか。私は大阪大学の所蔵本を借りて読んだのですが、そんなに優れたものとは思いませんでした。
- 三枝 : トラークルは他の詩人についてはほとんど述べていません。もともとドキュメントが少ない。詩でも『ノヴァーリスに寄せて』と『カール・クラウス』だけで、他の作家についてはゲーテの『親和力』についてすこし言及しているくらいです。
- 高橋 : 「詩などを苦勞して作っているより額に汗して働いた方がいい」というところで『親和力』が出てくる。また『リンパッハとの対話』の中で批判する形でニーチェが一回出てきます。リルケの影響もあるのですが、リルケのことなど一言も述べていませんね。
- 三木 : リルケとは全然違いますね。交遊関係が狭かったようですね。
- 植和田 : インスブルックの狭いグループに加わっていました。
- 高橋 : トラークルはリルケを意識していたのではないのでしょうか。手紙の中にリルケを意識して書いているくだりがあります。
- 三枝 : 蔵書の中に『新詩集』がありますから、これは多分読んでいたでしょう。

三木 : トラークルとヘルダーリンは詩人的資質からすると、非常な類縁性があるということは必ずしも言えないのではないのでしょうか。一般に詩人が別の詩人に対する親しみ方は一種独特ですからね。一言も言わないが深く結びついていることもある。十年二十年も経ってから働くこともある。ごく一時期リルケとヘルダーリンは非常に親近感があったことは否めない。そういう意味の詩人的資質としての近さということも、様々な人が言っているでしょうが、多少ともテーマとなるとは思いますが。

トラークルの詩に於ける形容詞の 中性名詞化について

伊藤 卓立

トラークルは形容詞の名詞化を、その作品の一特徴とみなすことができるほど、多用した。それ故、トラークルの詩作品を解釈する場合、形容詞の名詞化を正しく理解することは非常に重要である。事実この用法は「トラークル研究に於いて既にさまざまに研究されてきた」(Rudolf Dirk Schier: Die Sprache Georg Trakls). たとえばシュナイダーは、形容詞の名詞化は「トラークルにとって典型的、かつ、啓発的なメタファー」である、と言っている(Karl Ludwig Schneider: Der bildhafte Ausdruck in den Dichtungen Georg Heyms, Georg Trakls und Ernst Stadlers. Studien zum lyrischen Sprachstil des deutschen Expressionismus)。しかし、すべての形容詞の名詞化が難解であるというわけではないけれども、この用法がトラークルの詩作品の解釈を困難にさせているのも事実である。例えば、次に示す人間を示す形容詞の名詞化であるならば、我々はそれを一応理解することができる。

Am Abend trugen sie **den Fremden** in die Totenkammer.(.) (Unterwegs S. 81-2)
「夕方、彼らはその**異邦の男**を死体置き場へ運んだ(。)」

... an hölzerner Stiege lehnt

Wieder der **Fremden** weißer Schatten. -- (Gericht S. 316-13/4)

「・・・木製の階段にもたれているのは
またもやあの**異邦の女**の白い影だ。 —」

... langsam gehn die **Fremden** wieder fort. (In einem alten Garten S. 181-9)

「・・・ゆっくりとその**異邦の人**たちは再び立ち去って行く。」

このように人間を意味する形容詞の名詞化は、一応の理解にとって特別困難な用法ではない。それ故、人間を理解する形容詞の名詞化についてホルムートは、「抽象化と本質化」

の傾向は認められるが、「ことのほか取り立てていふべきことはない」、と言っている (Norbert Hormuth: Sprachwelt und Wirklichkeit. Die Struktur der lyrischen Eigenwelt in den Gedichten Georg Trakls.)。

しかし、次に引用される形容詞の中性名詞化を理解することは非常に困難である。

Die Drossel ein Fremdes in den Untergang rief. (Sebastian im Traum)

この場合、形容詞の中性名詞化は「事物・事柄を表す」(橋本文夫『詳解ドイツ文法』) という説明に従って、この詩句を「黒鷓が異邦の事物を破滅へと呼び入れた」、と日本語に翻訳したところで、「異邦の事物」の本質・実体が理解されたわけではない。即ち、形容詞の中性名詞化は、トラークルの詩的世界像の解明にとって示唆に富んでいるにもかかわらず、その本質を理解することが非常に困難な用法であり、しかも、トラークルはこの用法を多用しているのであるから、正にトラークルの詩的世界を特徴付けている、トラークル独自の用法である、と言える。それ故、トラークルの詩的世界を解明するためには形容詞の中性名詞化が先ず正しく解釈されなければならない。そこで、この機会に、トラークルの詩作品に於ける形容詞の中性名詞化の機能を解明するために、若干の考察を試みたい。

先ず、トラークル研究叢書の第7巻『コンコルダンツ』を手掛かりに、オットー・ミュラー社から1969年に出版された『歴史・批判版全集』第一巻に収録されている推敲段階に於いて用いられている形容詞の中性名詞化をリスト化すると、形態上純粋な形容詞の中性名詞化が98語、このうち、『歴史・批判全集』の第二巻にのみ見いだされる、即ち、推敲の段階でのみ用いられたものが22語、更に、意味内容上から中性の名詞化と断定することができるものが12語ある。それ故、合計110語の形容詞の中性名詞化をトラークルは用いていることになる。

しかし、形態上、及び、意味内容上、男性名詞化とも、中性名詞化とも断定することができない用法が更に47語ある。

ここで、先人の見解に耳を傾けてみると、ホルムートは、「抽象化(Abstraktion)、一般化(Verallgemeinerung)、本質化(Verwesentlichung)」の究極的に完成した姿が見いだされる形容詞の中性名詞化は、「人間、動物或いは植物を表示するためにしばしば用いられる。部分的にはそれ(形容詞の中性名詞化)はコンテキストからこれらの分野の一つに明確に分類される、しかし、たいていの場合そのような明確な分類は不可能である」、と言っている。

シュナイダーは1968年に、「疑いもなく Verwestes (腐敗したものは、der verweste Mensch (腐敗した人間)の一種の縮約(Kontraktion)として理解することができ」、また ein Totesというメタファーは、「現代の人間に対する詩人の紛れもない主観的象徴である。それは外面的な性格描写などというものではなく、本質看破(Wesensschau)と本質規定(Wesensbestimmung)の試みなのであり」、かくして「人間に人間的なものの確固とした特徴を与えることができるのである」、と言っている。

この見解はその後支持され、或る日本のトラークル研究者は、その翻訳に際して、詩

『秋の夕べ(Ein Herbstabend)』の一行目の ein Dunkles について次のように言っている。「トラークル」の場合は、後者の形(中性形)も人間の姿を描き出すために用いられていると考えられる。シュナイダーによれば、対象の一つの特徴が、全体的な特徴を押しつけて描写されているのであり、そこには、詩人の個人的気分や主観的判断と言ったものが強く現れている。そして、それにより、その言葉のもつ象徴的意味が拡大され、それを詩人は、対象の外形的描写というより、対象の本質を規定するために用いるのである。言い換えれば、ある偶然的な特徴が、詩人の内的気分と一致することにより、人間の永続的特徴へと高められるのである(トラークル『トラークル詩集』、<中村朝子訳>)。

1970年にシールは、「日常的な言語習慣では krank(病気の)、aussätzig(癩病にかかった)、dunkel(暗い)、bleich(青ざめた)といった言葉は続く名詞に関する主体の判断を含んでいる。・・・しかし名詞が消滅するや否や、そのような判断を下すことはもはや不可能である。規定は遙かにより一般的(allgemeiner)、より包括的(universaler)となる」、と言っている。

これらの発言を纏めれば、四人のトラークル研究者が、形容詞の中性名詞化がトラークルの詩作品において「抽象化」、「一般化」、「本質化」の機能を持つ、と判断していることは明らかである。しかし、リルケが「詩は・・・感情(Gefühl)ではない、それは様々な経験(Erfahrungen)だ」(SW 6, S. 724)、と言っているように、詩人の個人的な体験を免れ、完全に一般的抽象概念だけで捏造された文学作品はあり得ない。即ち、詩人は自らの魂を震撼させた体験を詩的に造形化するのである。それ故、「抽象化」、「一般化」、「本質化」という抽象概念だけを用いて詩人の個人的な実存体験が詩的に造形化されている言語芸術作品を理解することは、特に悲痛な運命を生き、大量のコカインの服用によって27歳で事故とも自殺ともとれる死を遂げたトラークルのような典型的な破滅型の詩人の場合、全く不十分である。このことは、詩人の次の詩句を読めば、明らかである。

Armer Sünder ins Blaue versehnt(.) (Gericht)
es sinnen die blutenden Herzen noch Böses. (Traum und Umnachtung)
Ein Wolf zerriß / das Erstgeborene(.) (Traum und Umnachtung)
Die Arme lassen ein Erstorbenes los, (Die Verfluchten)
Silbern weint ein Krankes, / Aussätziges am Weiher, / Wo vor Zeiten /
Froh im Nachmittag Liebende geruht. (Abendland 2. Fassung)
sie (Mutter) trug in schlummernden Händen das Schmerzgeborne nachtwan-
delnd im Garten. (Erinnerung)
O Schmerzliches! Schuldiges wandeln im Garten(.) (Die blaue Nacht ist
sanft ...)
Wie scheint doch alles Werdende so krank! (Heiterer Frühling)

近親相姦と嬰兒墮胎を窺わせるこれらの詩句は、単なる一般的な抽象概念ではとうてい理解することができない、トラークルの正に個人的な、宿命とも言える深刻な体験が詩の成立の根底にあることを示唆している。

トラークルは詩『魂の春』(Frühling der Seele)において、

魂はこの地上界では異邦のものなのだ。

Es ist die Seele ein Fremdes auf Erden.

と言っているが、トラークルを突き動かして詩を歌わせている魂が男性名詞でも女性名詞でもなく中性名詞であるということは、トラークルをして詩人たらしめている魂が正に名状し難いものであることを意味する。リルケはこのことを次のように言っている。「それ(想い出)が我々の中で血となり・・・名状しがたいもの(namenlos)となり、我々からものはや区別する事が出来なくなって、ようやく、めったにあり得ない瞬間に、詩の最初の一言が思い出のただ中に浮かび上がり、そこから現れ出てくるのだ。」(SW 6, S. 725)この名状しがたくなり、トラークル自身と完全に一体化した体験が、名状しがたいからこそ中性名詞化として表現されるのである。かつてリルケは、トラークルによって新たに切り開かれたこの詩的世界を「精神的空間の新たな次元」(eine neue Dimension des geistigen Raums)(Br. a. Buschbeck v. 22. Feb. 1917)と呼んだが、トラークルは、正にこの「精神的空間の新たな次元」を表現する手段として形容詞の中性名詞化を多用したのである。

高橋喜郎 : ザッハリッヒなことですが、引用された手紙の中で106 番の手紙の出された時期は、フィッカーの『Erinnerungen an Georg Trakl』から HKA迄1913年11月末と定説になっていますが、Sauermann の検証により、1914年 4月 1日頃という説がもう一つあります。もう一つ『Passion』の決定稿を引用されましたが、第一稿ではもっとはっきりしていて、聖書の引用と分かる箇所を決定稿では消去していると同時に私的なことが表に出てくることを分からなくしています。Mischten wir unser Blut と第一稿には wirがありますから否定出来ないことになってしまいますね。

伊藤 : wirであると多義性が消えてしまいますね。

植和田光晴 : 手紙の宛先のヘルミーネは下の姉ですね。フリードリヒ・トラークルに対しても書いていますね。手紙の宛先は二人とも身内なのです。御指摘された文面の直ぐ後に vorbei! Heute ist deine Vision der Wirklichkeit wieder in Nichts versunken, という表現が出てきます。きれいさっぱり地獄の物たちは去ってしまって、ものすごくいい気分になったようで、薬物の直接の影響を書いたとも取れる。深刻な Inzest まで遡らなくても何とか取れそうです。最後散文詩のところですが御指摘のように Kinder eines dunklen Geschlechts はむしろ自然主義的に解釈すると、これは Familieとなるわけですね。トラークル自身も自分も墮落していたと思っていたわけですが、母親に対する感情は非常に複雑ですよ。

高橋 : トラークルは兵役に就く時母を Opium Fresserinと言っています。

伊藤 : Geschlecht というのはトラークル家のことがかなり濃厚に感じられる。自

分たちのような者を最終的に生み出した家系の血というものが感じられる。
die bösen Blumen des Blutsのような表現が直ぐ出てしまう。

三枝 : 高橋さんが指摘されたところですが、最初 wir というようなあからさまな語
が出されるのですが、そういう私的な語が消去され次第に表現が抽象化され
一般化されてしまう。そういう手続きを追って行って、やはりその延長上に
形容詞の中性名詞化というものがあるのではないのでしょうか。一般的には形
容詞の中性名詞化によって詩的表現の世界が広められたということも言える
のではないのでしょうか。Vieldeutigkeitを形容詞の中性名詞化によって表す
ということです。またトラークルは非常な読書家でしたから、中世の神秘思
想家の著作も読んでいたのではないのでしょうか。したがって彼らの書に頻繁
に使用されている形容詞の中性名詞化の影響も考えられるのではないでしょ
うか。

植和田 : そうですね。二番目の Abgeschiedenes、これも神秘主義の代表的な語です
ね。離在者、世捨て人、社会から身を引いた存在なのですけど、これは多
分神秘主義と関係の深い語だと思われます。

三枝 : 中世神秘主義の語法のみならずその思想のトラークルに対する影響も検討す
る必要があると思います。

<コラム>

私の好きなトラークルの詩

三枝絃一：『Verklärter Herbst(はれやかな秋)』

暗い魅力に富んだ詩が大半を占めるトラークルの詩の中にあって、これは最も明るく肯定的な詩で、表現主義とも無縁です。ここに示されているイメージの数々はトラークルのものですが、明快で一般受けのする詩と言ってよいでしょう。したがってこの詩はドイツの一般的な詩華集に大抵載せられています。トラークルの代表的な詩ではないのですが、これを読んで誰しも嫌いだという人はいないでしょう。ただ一つ日本人の読者にとって違和感を覚えるのは、冒頭の Gewaltig でしょうが、秋が急激に訪れる彼の地の気象を知れば納得がいきます。私はこれを読むとほっとした気分になります。トラークルにもこういう詩があることは、一つの救いではないでしょうか。農夫の言う Es ist gut. に集約される人生肯定的なイメージと響きは充足感に満ちています。またトラークルの詩に多く見られる「下降のモチーフ」(第3連)も滅びや没落に直接繋がるものではなく、人に安息感を与える領域に留まっています。今流行の言葉を借りれば「癒し系」の詩と言えるでしょう。

2001年度活動報告

1. 6月9日(土)午前10時より12時迄春季総会及び研究発表会が調布市文化会館「たづくり」で開催される。

出席者： 石橋道大、植和田光晴、三枝紘一、高橋喜郎、両角正司

総会 (1)2000年度の大会の決算が報告され承認された(別掲)。

(2)研究発表また会報の原稿の応募もほとんどなく、発表者も一部に偏りがちになっているので(特に未発表者に)その都度要請する。

(3)シンポジウム「トラークルの詩における blau(仮題)」を早ければ来年度の春季研究発表会に間に合うように準備する。トラークルの詩作の期間を6期に分け、それぞれから blau を含む詩を3から6編を選ぶ。そして6人がそれぞれ1期ずつを担当する。その前にトラークルの色彩について論じられた参考文献が必要なので会員の皆様に、このような文献をお持ちであれば、そのリストを送っていただくようお願いする。

研究発表会

植和田 光晴：「書簡から読みとる「体験」の変容について」

(次に予定していた、三枝紘一：「トラークルのヘルダーリン受容に関する若干の考察」は最初の発表が長引いたため次回に持ち越しとなった)

2000年度決算報告

自2000年 4月 1日至2001年 3月31日

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	94039	切手代	8640
本年度会費	56000	封筒	267
		会報印刷代	15000
		<u>本年度支出合計</u>	23907
		<u>次年度へ繰越</u>	126132
		(内、本年度剰余金)	32093)
<u>合計</u>	150039	<u>合計</u>	150039

2. 7月25日東京の新宿において本年度第一回幹事会が開催される。

3. 10月20日(土)午前10時より12時迄秋季総会及び研究発表会が松本市の松本ツーリストホテルの会議室で開催される。

出席者： 伊藤卓立、植和田光晴、三枝紘一、高橋喜郎、三木正之

総会 シンポジウム「トラークルの詩における blau(仮題)」について

トラークルの blau を含む詩が年代別に6グループに分類されたのをうけて、それぞれを一人ずつ担当することになり、発表者がどのグループを担当するかは、発表者の希望ということになった。グループ分けされたリストを会員各位に送付し、担当希望のグループを募ることになった。また担当者が決まり次第トラークルの色彩語についての参考文献のコピーを発表担当者に配付することになった。

研究発表会

三枝 紘一：「トラークルのヘルダーリン受容に関する若干の考察」

伊藤 卓立：「トラークルの詩作品に於ける形容詞の中姓名詞化について」

4. 3月11日東京の新宿において本年度第二回幹事会が開催される。
5. 3月31日2001年度会報が発刊される。

会員消息

退会者 加藤泰義 (2001年 6月25日逝去)

前田和美 (2001年10月 5日逝去)

お知らせ

1. 会報に会費用の振込用紙を同封しましたので御納入の程よろしくお願い申し上げます。
2. 春の例会は次のように行われます。

日時：6月 1日 (土) 午前11時から午後 1時迄

会場：草加市文化会館第1研修室

1) 総会

2) 研究発表会 両角正司 「ホーフマンスタールの色彩と詩の Ort についての試論 — トラークルとの対比のために —」

高橋喜郎 「ヴァイクセルバウムの『Georg Trakl』について」

編集後記

今回は発行が大変遅れてしまい誠に申し訳ございませんでした。紙面を借りてお詫び申し上げます。理由にはならないと思いますが、編集者の身边に様々な雑事が生じたためです。

さて今から百年前に遡りますと、トラークルは15歳に達しており、詩作を始めた時期に当たります。また麻薬を覚えたのもこの時期とされています。更に前年ではありますが最初の留年をしています。従って百年前はトラークルの人生にとって大きな転機の時期になります。翻ってこの間の百年を考えますと、その変遷・変動に感慨を禁じえませんが、多くものの現代的なものへの基底的な転換は、すでに百年前頃になされていた感があります。それを詩人の魂はある種の危機感をもって地震計のように敏感に感じ取っているように思われます。その魂の揺れが我々に共鳴を与え続けているのかもしれない。(さ)